

## 伝記、ルポルタージュ、啓蒙科学書 : 1920年代以降のそれらの歴史に関する覚え書

著者	Helmut Kreuzer, 杉谷 眞佐子
雑誌名	独逸文学
巻	27
ページ	153-188
発行年	1983-03-25
その他のタイトル	Biographie, Reportage, Sachbuch. : Bemerkungen zu ihrer Geschichte seit den zwanziger Jahren
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/6966">http://hdl.handle.net/10112/6966</a>

# 伝記，ルポルタージュ，啓蒙科学書

—1920年代以降のそれらの歴史に関する覚え書<sup>1</sup>—

ヘルムート・クロイツァー

杉谷眞佐子 訳

ゲオルク・ルカーチは、1932年「科学と芸術の基本的な記述様式」は相互に排除しあうということを確認しました<sup>2</sup>。このテーゼで彼がワイマール時代左派のルポルタージュ小説について決定的な判決を下す数年まえ、著名な歴史学者たちは右翼政治家たちの強力なリーダーシップのもとで、稀にみる協同行為をおこない、20年代のいわゆる「歴史文学」(Historische Belletristik)が不法侵入者であるとして戦いをおこしました<sup>3</sup>。攻撃目標は同業者以外の手になる伝記小説(Biographie romancée)で、代表作家はエミール・ルートヴィヒ、ヘルベルト・オイレンベルク、シュテファン・ツヴァイク等でした(同様の作家として英国のリットン・ストレッチー、フランスのアンドレ・モーロワ等が挙げられます)。左右両派の攻撃の焦点は、文学的事実と歴史的社会的事実の関係、及び文学と科学の関係についてでした。相反する陣営で奇しくも同時に同一対象を目標に戦線が形成されたことは、上述の関係を理論的にも実践的にも新しく定義しなおすことが、20年代では時代の緊急な課題になったことの証拠といえましょう。ここでは(紙数の制限もあり)、文学の進展という見地から文学と科学の問題に話を絞ることにします。文学と科学の対立は明らかに歴史的現象であるとされ、それ故に歴史的に変化しうるものとみなされました。両者の対立はそれほどまでに変化し、むしろ両者の結合へと人々を魅きつけたのでした。しかしもし文学と科学の対立を根本的現象であり、変化しよ

うのないもの、歴史によって一時的に注目を集めたにすぎないものと理解するならば、それらを各々の「不純な」形式の混入から守ることが重要だと思われたことでしょう。

先ず両者が歴史的に分岐していくプロセスをみることにしましょう<sup>4</sup>。18世紀に至るまで両者は事実上隣接し絡みあっていました。勿論（アリストテレスの伝統にたち）科学の領域にはより多く事実性が、文学の領域にはより多く可能性の空間が、所属するものと考えられていました。19世紀になると、この「調和」は破れます<sup>5</sup>。昔から伝統的にレトリックの—ジャンルであった歴史記述は、ロマン派の時代に「詩学上の高度な期待の念から革新された」<sup>6</sup>のものでしたが、ロマン派の「すべてを、芸術も科学も融合してしまう普遍詩（Universalpoesie）の構想」は、歴史的にみて通用しないものであり、むしろ「弁証法的に反応を示しあいながら、科学と文学が特にドイツで厳しく分岐していき、かつては、『散文文学の技』により架けられていた文学と科学の間の橋が忘れ去られてしまったことのひとつの理由』<sup>7</sup>となったかもしれません。しかしながらまだナポレオン戦争後の復古時代、ドイツ観念論の思弁哲学と、持続的な作用力をもつレトリックが少なくとも部分的には両者を結合する力をもっていました。1848年3月革命後、ブルジョワリアリズムが主流となった時代、両者の間には完全な溝ができてしまい、文学と科学の分裂も深まり、更に科学の諸領域で専門化や形式化が進んだ結果、その分裂は決定的なものとなりました。

アレクサンダー・フォン・フンボルトは、3月革命前夜でもなお、「世界記述」と「世界史」<sup>8</sup>、また自然科学と精神科学とを、互いに経験科学として対等に扱い、みずから、「古典主義的」文学伝統に基づく、構成上の、または言語上の手段を用いて、自然科学研究の諸成果を専門家のサークルを越えて、重要と思われる読者対象へ媒介することを試みていました。彼は文学上の目標と科学的目標の結合を肯定し、「想像力を働かせつつ、知識を増大することにより様々な思考で人生を豊かにするという願望」<sup>9</sup>を肯

定していました。その著書『コスモス』——出版者コッタの主張によると、1869年、即ちフンボルト生誕百年にあたる年、聖書に次いで「最も広く読まれた本」<sup>10</sup>であった——にかんしてフンボルトは、1841年得意そうに、自分の言語は「それ程知識がない人々……にもあまり抵抗を感じさせない」<sup>11</sup>と、語っています。

1850年以降もまだ一般大衆を念頭において書き大きな影響力をもっていた学者は少なくありませんでした。例としてトライチュケやテオドーア・モムゼンのような歴史学者、自然科学者エルンスト・ヘッケルのような名が挙げられます。さらに文学と科学の境界をおおうジャンルとして、学術的歴史伝記や随筆などもありました。しかし諸科学の実情は全体的にみると、科学と専門家外の読者層（いまではこの層に当該領域外の専門家たちも含まれ始めるようになりました）の乖離を促進していました。同時に科学や文学を各々自明のものとする考えが固まり、その考えにより両者は厳しく分けられ、相互に敵対的な二律背反論的な性格さえおびてくるようになりました。各々の分野では（ロマン派時代既に見られた）相互軽視、自己尊大化の傾向がありました。一方の極では文学を純粹な芸術として、即ち個性や心情、空想の避難場所、またすべてのより高い価値、或いはより深い真実の避難先として芸術を祭りあげる傾向がみられました。それらのものは科学や技術、経済という疎外をもたらす敵対勢力により危険に曝されているとみなされたのでした。他の極ではプラス・マイナスの記号が逆にされたのです。「芸術」は非現実的な仮象や具体的結果を伴わない遊びの領域として顕われ、労働する人々の休暇や休日に属するものとされ、存在を崇高なものにする飾りではあってもいかなる必然性もないものとされました。対立勢力としての科学は、真剣な労働、文明発展の原動力、理性的方法の真髓、個性を超越する客観性とみなされました。「芸術」と「科学」はこのような考えによると、遊びと真剣さの緊張を伴った子供の世界と、理論と実践の緊張を伴った大人の世界のように、対立しているとみなされ

たのでした。科学における「芸術」(Kunst) は、記述の巧みさへと縮少され、文学における「科学」(Wissenschaft) は、細部描写における事実性尊重 (Faktentreue)、アナクロニズム回避などという専ら内容的要素へと縮少解釈されてしまったようにみえました。

しかし実際は19世紀のどの時点でも文学と科学の間には生産的な相互作用がみられたのでした(丁度その両者と政治との間にも相互作用がみられたのと同じです)。複雑に絡みあう様々な伝統の緊張関係のなかで、文学は、さらにそれじたいの中で相対立する機能を満たしていました。一方で文学は平凡な日常における夢や想像の「反現実世界」を創り、他方では、作品中の人物に自己を再認識するということで、読者にたいし経験世界の方向づけを助けたのでした。例えば19世紀歴史小説は、歴史諸科学と結びつくことで読者のまえに、現在の前史としての過去を開示してみせ、ひいては帝国建設のための決定についての自覚を、民族自由主義的精神の立場からドイツ・ブルジョワジーに媒介したのでした。空想的未来小説や宇宙小説は、「教訓的な未来図や初期空想科学冒険小説、技術や宇宙にかんする奇想天外な発明」<sup>12</sup>でもって科学技術の発展に呼応したのでした。社会派現代小説は、自然科学や経済学、マルクシズムの、或いは実証主義哲学の説明のモデルを利用しました。そのさい、いわば「外なる世界」の文学は社会学を、「内なる世界」の文学は心理学を先どりしていました。

しかし文学史的にみた経験的事実が、既述の文学と科学の二律背反論の正当性を部分的にしか肯定していないという事は、この論の影響力を否定したことはありません。その両極の間に位置するような反対論者たちも、既述の論の影響から完全に脱してはいませんでした。例えばドイツ自然主義の芸術家像や文学論にもそれはよみとれます<sup>13</sup>。ドイツではさらに国家史的事情も作用していました。市民階級の解放がドイツ政治の土俵の比較的狭い範囲でのみ行われた結果、美的・歴史的教養が、政治的社会的実生活における失望と諦めへの補償という代替作用を果たしたのでした。

教養市民階級の一部は、商業市民階級の経済的権力からも、また貴族階級の政治的軍事的権力からも自分たちが締め出されていることを感じました。彼らは実業学校的なものに対立し古典主義的教養に好感を示し、非実用主義的文化概念に共鳴し、精神と生活という対立図式をうけいれたのでした。そのやり方は、悲観論的運命論的であったり、或いはより行動的批判的であったりしました。ヴィルヘルム帝政時代、科学と芸術の対立は諸科学間の対立へと展開しました。実証主義の時代、精神諸科学はまだ自然科学の勝利の行進に追随していたのですが、世紀転換期の両陣営における代表的な学者たちは、共通性より対立性を強くうち出しました。(後の C. P. スノーの概念でいう)「二つの文化」の乖離は一般の通念となりました。文化を扱う諸科学は歴史や個人へと向かい、「教養財産」をうみ出す芸術へ接近しました。他方自然科学は技術へ接近し、産業界へ「実用財産」をうみ出す手段を与えました。文化と文明という二律背反論は次第に共感を得て、イデオロギー闘争の一手段となり国際的にも活用されました。「深遠」な文化はドイツの宣伝文句となり、「浅薄」な文明は西欧民主主義諸国のつけにまわされました。

しかし世界大戦の物量戦や宣伝戦では西欧が勝利しました。「権力に守られた内面性」はヴィルヘルム帝政時代の領土拡張政策的な権力意識と同様、歴史の歩みから否定されたことを感じました。近代戦争や階級闘争及び戦後の経済混乱時の個人意志の無価値性、個人の運命の大衆への依存性は、古典主義とロマン主義、ブルジョワ自由主義、プロイセン貴族主義などの諸伝統に培われてきた個人崇拜の概念を崩壊の危機に直面させたのでした。ジークフリート・クラカウアーはこのような精神的状況に、20年代の、国際的にも大成功を収めた伝記小説ブームの原因をみています。つまりブルジョワジー読者層は、個人崇拜概念の崩壊からの逃避を伝記小説の中に求め、そこでの救済を空しく試みたのでした。「もし個人崇拜概念の終焉を確認できるものがあるとすれば、それは現在の文学が賛美している、偉

大な個人たちの博物館の中においてである。そのさいあらゆる国家的人物を掌中に収めようとする伝記文学のみせた慌しさは、……救済者たちがその事業をいかに急いでいるかを証明している。どの絵も等しい価値をもつ思い出が花開くような肖像画の殿堂を建てるのが急務であったのだ。たとえひとつひとつの伝記が疑わしいものであっても、引退の栄光はそれらの共同体感の中に根ざしているのである。」<sup>14</sup>（今日の伝記文学の隆盛は、彼の診断の妥当性を低めているかもしれませんが。しかし、この診断自体が20年代の個人主義伝統の危機や当時の反ブルジョワ的そして左派ブルジョワ的文学にみられる集団主義的傾向に特徴的なものだと思います。）クラカウアーによると、歴史的伝記文学は、個人主義的・心理主義的小説の代りに登場したものでした。「何故なら伝記は気ままに漂う小説と異なり、形式を規定するような素材を加工するからだ。伝記文学の積極的役割は、それが芸術諸実践が現に呈している混沌のなかで、唯一の、一見必然的な散文形式を提示していることにあった」<sup>15</sup> のでした。「歴史的に影響をもつ人生の流れ」は起・転・結という構成を予め既に内包しており、恣意的な虚構文学がかかえていた自己正当化の問題を回避できたのでした<sup>16</sup>。

「新ブルジョワジーの芸術様式」<sup>17</sup> としての伝記文学はこのように、伝統的小説の危機<sup>18</sup> の証拠でもありました。より年長の小説家——トーマス・マン、ムーゼル、ブロッホ等——は危機状況からの脱出を時事問題を主題としてもつ哲学的随筆風の小説や内省小説に求めました。歴史小説はまず最初に政治的右派陣営のなかで書かれました。しかしその先頭で活躍したのはエルンスト・ユンガーという、従軍日記や随筆風時代分析、政治的時事評論の作家でした。自由主義的或いは左派の主に若い世代の作家たちは美的衝撃を与えるよりむしろ政治目標のためにアヴァンギャルドのモントージュやコラージュの技法を使い、記録・統計・写真・映像により、虚構文学の閉鎖性をうち破ろうとしました。そして心理主義的暗示に代わり、啓蒙・アジテーション的效果を追求しました。受容史的にみて最も重

要な1930年頃の小説形式は、自伝に基づいた従軍記で、読者からも批評家からも、事実性を基準に評価されました。(レマルクの『西部戦線異常なし』はその代表例です。)戦前、抒情詩、演劇、小説を書いていた作家たちはいまやノンフィクションの散文ジャンルで成功し、虚構化の技法をこの分野へ持ち込みました。純文学系出版社も彼らの作品を読者大衆や文芸批評界へ媒介し、アクチュアルな話題を提供しました。彼らの成功が、本論の初めに触れた1930年頃の論争の出発点となったのでした。歴史的・心理主義的関心が強い伝記小説 (Biographie romancée), 社会学的・政治学的関心が強いルポルタージュ, 技術的・自然科学的関心が強い啓蒙科学書 (Sachbuch, 一種の Faktographie romancée) は、20年代30年代における新文学ジャンル形式の典型的な三例であり、同時に一時代を画する証拠ともいえます。これら三形式を戦前の科学と芸術の枠内で捉えようとするのは、その歴史的意義や、それら諸形式にふさわしい歴史的判断規準を見おとすことになりかねないでしょう。

自由主義的民主主義的憲法のもとでの新共和国の誕生により、出来るだけ多くの大衆が文化へ参加すること、戦前の社会民主主義やプロレタリア階級の野党的サブ・カルチャーを文化の主流へ合流させること、新社会を鋭意に探究し、詳しく識ることなどが必要となりました。このことは新しい歴史的視点の設定や、より包括的な社会的関心などと並び、次第に専門化していく科学と、それが利用され常に多大な影響を与える社会との間を架橋する新しい媒介形式を規定することとなりました。上記の新ジャンル(及び20年代の他の新傾向)を正当化する政治的社会的理由や、それらが一般社会から受容された理由が、このような時代的背景の中に見出されます。新しいジャンルはいずれも、科学的基礎、文学的手段、アクチュアルな機能を求めています。文学上の新ジャンルの登場により文学、科学、ジャーナリズムの間の境界のみならず、その上下関係も覆えされ、当時の『文学世界』(Literarische Welt)のアンケート調査によっても同様の結



果が確認できました<sup>19</sup>。「一番下にジャーナリスト、次に批評家、著述家、随筆家、小説家、歴史家、最上階に詩人という昔の梯子」はもう反古同然であり、「ドイツ階級精神の遺物でしかない」<sup>20</sup>と感じられたのでした。歴史の専門学者たちは広範囲の読者に新しいドイツ史の視点を与えることはできませんでした。総体的にみて、そのためには思想的にまだあまりにも保守的であり、形式的にあまりにもアカデミズムの枠に捕われていたのです。当時の歴史学同業組合のマルクシズム的アウトサイダーであったエックルト・ケーアは新しい歴史的伝記文学登場の契機をこのような理由の中にみえています。彼はまた伝記文学にたいし1930年、それらが対象の私的生活の描写にのみ専念し、本来伝記文学が有していた好機を逸したと批判しています<sup>21</sup>。以下私は典型的な例として、激しく非難されたエミール・ルートヴィヒについて述べてみます。

20年代、30年代ルートヴィヒは、国際的に最も著名な文学的知識人代表者のひとりでした。国外亡命中彼に出会ったヒルデ・ドミーンは1974年の回想録の中で、ルートヴィヒのかつての名声に対し、新しい文学事典が僅か数行しかさいていないことを不思議に思い、次のように述べています。

「1941年合衆国のあるフットボール試合の会場でアナウンサーが『皆さん方の中にエミール・ルートヴィヒ氏がおられ、初めてアメリカン・フットボールの試合を観戦しています』と告げ、何千人もの観衆が立ち上がり彼に挨拶をしたことなど今や誰も考えはしないだろう。ブエノス・アイレスやリオでも彼らは立ち上がったであろう。そこでは彼は、もうひとりの国際的に成功した作家、シュテファン・ツヴァイクと同様、今日でも我が国よりもっと多く読まれているのである。」<sup>22</sup> ルートヴィヒはヴィルヘルム帝政時代無名の演劇作家として出発し、後に随筆、小説、ルポルターージュを書きました。1920年最初の注目された伝記『ゲーテ。ひとりの人間の歴史』を著わし、14カ国語に翻訳されました。その後殆んど毎年、彼は伝記を発表し、多く翻訳され幅広い共感を得ました。それらはレンブラント(1924)、

ナポレオン (1925), ヴィルヘルム二世 (1925), ビスマルク (1927) 「ひとの息子」 イエス (1928), ミケランジェロ (1929), リンカーン (1930), シュリーマン(1931) などの人物にかんしてです<sup>23</sup>。そのように「將軍, 詩人, 総監, 君主, 作曲家, 探検家, 宗教家たちは大鍋の中へと注ぎこまれ, 偶然と時勢が彼らを鍋の中から引きあげたのだ」<sup>24</sup> と, 後世レオ・レーヴェンタールは, ツヴァイクとルートヴィヒを回顧するなかで揶揄しています。ルートヴィヒの関心は特殊な歴史的状況より, 特殊な心理的情况へ向けられており, それを彼は脱歴史的に「永遠に人間的なるもの」<sup>25</sup> として理解したのでした。「私の著作はドラマであれ伝記であれ, 人間心理の認識に役立とうとしているのだ」<sup>26</sup> と彼自身述べています。それは彼にとりいかなる時代, いかなる言語, いかなる民族においても同一のものなのでした<sup>27</sup>。「沈黙の会話をビスマルクと行なおうが, 庭師と行なおうが, 私にとっては同じことである。何故なら私にとり重要なことは心の反応であり, ポケの木につき木をするのも, 国民につき木をするのも結局は同じ情熱に動かされてなされるからである。」<sup>28</sup>

多様な歴史的状況の背後にあるすべての「人間的なるもの」が, 精神や権力の最高潮にいたるまですべて, 同一であり理解可能であるという彼の確信は, 明らかに彼にとり伝記作品の対象の選択と描写を容易にし, また彼の「モデル」の並べ方にみられる, あれ程批判された恣意性や, 驚くほど早い仕事のテンポを可能にしたのでした。彼は読者に(映画を連想させる技法で)歴史的パノラマを, アイデンティティ確認の可能性の場として与え, 歴史的人物や芸術家の人生を, 読者と同時代の日常体験の典型例に基づき解釈したのでした。「論争する二人の大臣の間で決断を迫られる国王の感情を描こうとするとき, 私はかつて庭師が女中と口論したときの私の状況を思い出した。……またビスマルクの立身出世欲と名誉欲を人間的要素に……解体することに……成功すれば……, 読者である教師や酒場の主人, 縫い子は自分のことのように感じたのだ。何故なら彼らはドイツ帝

国全体の権力や帝国議会への統合を求めたりはしないが、それなりに学長の地位、或いは隣りの喫茶店との併合を求めているのであり……縫い子は自分の上司がこの章のヴィルヘルム皇帝のように時々……嫌な奴だと感じているかもしれないのだ。」<sup>29</sup>

ルートヴィヒの「魂の肖像画」は70年代のイデオロギー批判的独文学者にとり（勿論独文学がそれを研究対象とする限りにおいてですが）伝記的大衆文学の典型例となりました。即ち、複雑な絡みあいの中で、その歴史的個人主義と心理主義は、意志に反して、ドイツ小市民階級にファシズムへの道を準備する一要素になったというのです<sup>30</sup>。このテーゼは私には信頼に足るものとは思えません。とりわけ、経験的に証明された受容のされ方がそれに反しているからです。ルートヴィヒは比較的西欧の民主主義的諸国家で広く受容された作家でした<sup>31</sup>。ナチズム右派は、彼に対し敵意を表明していました<sup>32</sup>。積極的評価は他の陣営から下され<sup>33</sup>、左派の評価は分れていました。（今日でも尚彼の批評家たちが嘲笑するように）歴史的「英雄」を「君や僕と同じ人間」として描く彼の技法は、読者を第三帝国の人種差別的英雄崇拜へと向けたのではなく、一方では、左派が批判するように、歴史的政治的対象を脱歴史化、脱政治化しており、他方では、右派の不評をかったように、脱神話化しており、（非政治的であったにせよ）「民主化」したのでした。「歴史文学」の本質を、20年代の共和主義中道勢力や左派自由主義勢力へと関連づける根拠は、伝記文学的にみても、解釈学的にみても、また受容史的にみても充分にあります。当時の歴史家たちのなかで多くの敵対者はそのような思想的関連性のなかでみていました<sup>34</sup>。1933年ルートヴィヒの著作はベルリンの公開焚書場で次の言葉と共に炎の中へ投げこまれました。「我々の歴史の歪曲、その偉大な人物たちの卑小化に反対し、我々の過去に対する畏敬の念のために！ここにエミール・ルートヴィヒとヴェルナー・ヘーゲマンの書を炎に引きわたすものである。」<sup>35</sup>

当時の焚書執行人たちがブルジョワ的ルートヴィヒと同じ陣営にいるとみなしたヘーゲマンは伝記作者としてその目標や方法において前者とかなり違っていました。彼の批判的なフリードリヒ大王とナポレオンの伝記（1924年と1927年）は「未来の共和主義的、大ドイツ的、民主的ドイツ国に役立つべきである」<sup>36</sup>とみなされていました。それは個人主義的な感情移入の伝記文学ではありませんでした。むしろ資料や引用のモンタージュを利用し、それらは専門家たちの論争の場という虚構の枠へと結合されていました。そこには文学的伝記にとりひとつの新しい道が提示されており、それは60年代70年代の記録文学へと続いているものです。ルートヴィヒ・マルクーゼの1932年のハイネ伝も、歴史的対象を文学的大衆にとり政治的にアクチュアルにする目標をもっていました。マルクーゼはハイネを、保守主義、共産主義、ファシズムの間をゆれる当時の状況のなかへ、「フーゲンベルクと赤旗とゲッベルスの間」<sup>37</sup>ということばで明白に関連づけています。社民党員ヘルマン・ヴェンデルはかつて帝国議會議員でしたが、1930年発表の政治的なダントン伝で、感銘深い「環境伝記」(Umweltbiographie)<sup>38</sup>を著わしています。そこでは当時の体験を摂取し、個人と境遇、個人的要素と個人を越えた要素との関係を記述の原則としています。ジークフリート・クラカウアーのいわゆる「社会伝記」(Gesellschaftsbiographie)、『ジャック・オッフエンバハとその時代』(1937)はこの種の伝記が亡命中にも書き続けられたことを示しています。

左派の政治的伝記や歴史的伝記がルートヴィヒやツヴァイクに絶大な成功の座を譲らねばならなかったことは、当時の読者大衆の大半が、現状での歴史的・政治的方向決定を、過去の伝記に描写された人物との歴史的・批判的対話の中に探そうとしたのではないことを示していました。彼らにとり過去の人物の伝記はむしろ自分たちの感情的要求、共感を含んだアイデンティティの確認、人間への普遍的な関心や心理的興味を満たすために役だったのです。（丁度今日の一般向け歴史科学書のブームのなかで<sup>39</sup>、

歴史書の対象が、ゲルマン人、ギリシア人、ケルト人、ローマ人、エジプト人、フェニキア人、ヒッタイト人、エトルスク人、インカ人、マヤ人と、地理的に或いは時間的に充分にかけ離れているのと類似した現象といえるでしょう。それに対し読者大衆の歴史的・政治的関心は——今日と同様——専ら同時代史（Zeitgeschichte）へ向けられていました。この領域におけるルートヴィヒの親共和国的態度表明の意義は——彼の政治的事時評論と同様——見おとすことはできません<sup>40</sup>。クルト・トゥホルスキーも彼の親共和主義的影響力を次のように証言しています。ルートヴィヒの『ヴィルヘルム二世』は、「皇帝がうけたところの……最も手ひどい敗北」であった。そのような著作がいかに必要であり、有益であり、感謝されるべきであるか理解できないのは「直観力が全く欠けている者だけだろう。」<sup>41</sup>『1914年7月』に対し彼は熱狂的な反応をみせ、それを政府が戦争へ向う道を描いた「歴史的ルポルタージュ」であり、「ドメラとレマルクを一緒にしたより」<sup>42</sup>もっと多くの読者が読むことを希望しています。『ヴィルヘルム二世』（1926）、『1914年7月』（1929）、『ヒンデンブルクとドイツ共和国の伝説』（1935）、『ダヴォスの殺人』（1936）を、今日の「ヒトラーブーム」の同種の本——例えばヨアヒム・フェストやセバスチャン・ハフナーの著書——と比較してみても、ルートヴィヒの上述の著書の方が優れています<sup>43</sup>。恐らく一般に予想される評価より優れているでしょう。それらの著書に、20年代30年代の親共和主義的文学や反ファシズム文学が歴史の中で正当に占めるべき位置を拒否する、十分な理由があるとは思われません<sup>44</sup>。現代史を、自己が生きる集団の現在の前史を批判的に解明するものとして捉えるとき、現代史は、切れ目なく文学的ルポルタージュへと移行していくことができます。それは、現状や現在の諸問題の中へ批判的に浸透していき、解明しようと試みるものといえます。

ルポルタージュ<sup>45</sup>は第一次大戦前ブルジョワ文学の基準では実用ジャーナリズムのジャンルに入れられ、研究対象とはされず、文学的価値ももた

ず、各種テキストヒエラルヒーの中では「下層階級」とされていました。それが20年代後半の「新即物主義」<sup>46</sup>に代表される文化状況の中で上へ押しあげられたのです。「新即物主義」について1931年カール・ヤスパースは次のように書いています、「この技術時代における内的態度は即物主義と称される。レトリックではなく知識が、意味についての呻吟ではなく巧みな手さばきが、感情ではなく客観性が……求められているのだ。伝達表現は簡潔、具象的、非感傷的……である。冗長な言語表現は非難され、思想の構築……が求められている。個人は機能へ解体される。存在するとは即物的に存在することである。」<sup>47</sup>

「新即物主義」の綱領によると、レポーターはカメラとなり、訴えたり弁解したりせずありのままの現実の断片を映し出すものとされました。実際には、形式的な新即物主義的ルポルタージュであっても、様々な世界観・価値観をもっていました。アメリカ人の手になるロシア革命についてのルポルタージュが世界的に成功し、それがブーム到来の合図となりました。ジョン・リードの『世界を揺がした10日間』（1919）がそれです。プラハ出身の、ドイツで最も有名なルポ作家エゴン・エルヴィン・キッシュ<sup>48</sup>は、明確にリードの名を引きあいに出しています。二人とも大戦前ボヘミアンの世界で詩人として出発しました。二人ともルポルタージュの他、虚構の物語を書いていて、キッシュはさらに1914年娼婦たちの世界を扱った『娘たちの番人』という小説も発表しています。しかし文学的に有名になったのは1924年『世界を駆けるレポーター』というルポ作品集が発表されてからでした（1925年発刊となっています）。その序言は、当時の典型的なスローガンでもあります。「単純な真実ほど驚くべきものはない。我々をとりまく世界より異国的なものはなく、即物性より想像豊かなものはない。今生きている時代よりセンセーショナルなものはない。」このスローガンは新即物主義がもつエキゾチックな面、即ち日常世界をスリラー風に発掘していく技法をいいあてており、その技法はルポルタージュを映画や小

説と並べられるほどのジャンルにしたのでした。キッシュは映画の技法も応用しつつルポルタージュを様々な表現手段をもったオペラティブなジャンルへ、換言すれば、科学的通用性ももつ「芸術様式及び戦闘様式としてのルポルタージュ」<sup>49</sup>へと高めたのでした。しかもこの「科学的に検証可能な真実への要求こそがレポーターの仕事を危険なものにした」<sup>50</sup>のです。キッシュの政治的「危険性」については1935年セルゲイ・トレチャコフも証言しています。「『またもやプロレタリアが他人の仕事に鼻をつっこんでいる』という怒った資本主義的な音色の声が響くたびに私は、『一体誰の鼻だろう？』と自問する。そして次のように答えるのだ、この鼻こそエゴン・エルヴィン・キッシュだと……。」<sup>51</sup>

「新即物主義」の特色を表わすアンソロジーはエルンスト・グレーザー編集の『集計』(*Fazit*) (1929)です。それは最早クルト・ピントゥス編集の表現主義アンソロジー『人類の薄明』と異なり抒情詩集ではなく、報告を収集した「ドイツ時事評論断面図」となっています。序言には次のようにあります。「実際に存在する事件や、多くの場合は実際の状況が問題なのだ。よくある物語や小説ではなく、知識に支えられた見解が重要なのだ。ここに収録された印象のもとになっている対象はすべて検証可能である。メタファーが読者の検証を妨げるようなことはどの頁でも見あたらない。時代が収録されているのだ。何故なら時代が考察の対象となっているからだ。諸事象……は選別され美的粉飾は施されず、整理されただけである。『今日重要なことは、心情でなく理性を感動させることなのである』というテーゼがその結論となっている。」<sup>52</sup>

ルポルタージュの諸要素は従来の文学ジャンルへ浸透し、新しいテキストの種類をうみ出す力となりました。ジークフリート・クラカウアーは、1929年『サラリーマン』で社会調査、テキスト・コラージュ、文学的ルポルタージュを混合した独自の新形式を考案しました。それをエルンスト・ブロッホは「報告、インタビュー、幾つかのジャンル・シーンの展開、人

物描写，位置測定，社会探検の熟慮された組みあわせ」<sup>53</sup>と称しています。出版者エルンスト・ローヴォルトは1931年「若い世代の文学は次第に事実文学となっていくだろう。この方向にのみ成功の可能性があると思われる」<sup>54</sup>と断言しました。歴史小説の機能を新しい伝記が担ったように，新しいルポルタージュの波は，自然主義の伝統にある社会小説の機能を担いました（だからキッシュは自分がゾラに端を発する伝統上に位置することも知っていました。）映画による魅惑が「内なる世界の文学」に対するように，ノンフィクションの諸ジャンルは「外なる世界の文学」と競合したのでした。ルポルタージュ小説の混合形式は，主観と主観を規定する客観的事実との相互関連性を，形式の面でも認識可能とするため，記録と虚構の結合を試みたものでした。例としてエーリク・レーガーのルール工業地帯のモデル小説『硬手同盟』(*Union der festen Hand*, 1932)，ルドルフ・ブルングラーバーの失業者小説『カールと20世紀』(*Karl und das 20. Jahrhundert*)（個人を，無関心で非人格的な社会プロセスの犠牲として描いている）。エドレフ・ケッペンの大戦小説『軍隊の報告』(*Heeresbericht*, 1930)，（具体的経験とイデオロギー，個人として遭遇した事件の主観的体験と公的発表とのコントラスト）<sup>55</sup>等があります。共産主義者エルンスト・オトヴァルトの司法界小説『何故なら彼らは何をなすべきか知らないから』(1931)を契機にルカーチは虚構文学にみられるモンタージュやルポルタージュの新傾向を攻撃し<sup>56</sup>，後に亡命中有名な『物語るか記述するか?』という論文にまとめました。そのさいルカーチは文学的にはあまり重要でない作品を攻撃目標に選んでいます。実際は20年代のアメリカ，ロシア，ドイツの社会批判文学の代表者を狙っており，そこにはドス・パソス，アプトン・シンクレア，イリヤ・エレンブルク，トレチャコフ，そして勿論プレヒトの叙事的演劇論が含まれていました。「芸術家の生きた人間への巨大な関心，スケッチ，ルポルタージュの隆盛，すべて速記録のような記録，報告，議事録，日記」<sup>57</sup>へのエレンブルクの讃辞は，ルカーチ



には当時の典型的な現象として非難すべきものと思われました（こうした讃辞はそのままドイツ現代文学にもあてはまるでしょう）。

ところでイリヤ・エレンブルクは『自動車の生涯』(1930)で新しい型の啓蒙科学書 (Sachbuch)<sup>58</sup> へ道を拓いた作家たちのひとりです。彼は産業技術についての情報と批判的社会参加及び虚構の要素を結合しました。架空または実在の人物を用い、自動車産業の前史や歴史を彼は物語っています。このロシア人の著作に先行するものとしてアメリカではヘンドリック・ウィレム・ヴァン・ルーンの一般向け科学書の例がありました。それらは、「物語」(Story)の標題をいわば商標としていました。『人類物語』(1921)、『聖書物語』(1923)、『アメリカ物語』(1927)等です。特に大きな反響をよんだのはオランダ系アメリカ人パウル・ド・クリフの『ミクロンの狩人』(1926年、独訳は1927年、*Mikrobenjäger*)でした。ここでは科学の進歩をめぐる、科学者たちの生涯が小説風に綴られてゆき微生物学のひとつの研究史が物語られています。[後に『神、墳墓、学者たち』(1949)といういわゆる「事実小説」(Tatsachenroman)の著者ツェラムもド・クリフを引合いに出しています。ツェラムのこの考古学啓蒙書はアデナウアー政権下の西ドイツで、非政治的道を辿った科学書の中で、最も成功したものでした。]セルゲイ・トレチャコフは1930年いわゆる「物質の伝記」(Ding-Biographie)、即ち、『森』、『パン』、『石炭』等の標題をもつ作品を試みました。30年代この種の本は少なからず出版され、例えばパンやコーヒーという食料品やラジウム、弾性ゴム等の素材原料にかんする、ハインリヒ・エドゥアルト・ヤーコプやルドルフ・ブルングラーバーの啓蒙科学書等があります。

1933年以降左派啓蒙科学書は殆んど弾圧されてしまいました。ファシズム的或いは純粋に技術的なものは逆に奨励されました。というのも官製の農民崇拜イデオロギーは技術革新のプロセスと結合していたからです。ファシズムの科学書の代表作家はアントン・ツィシュカとカール・アロイス

・シェンツィンガーで、彼らの影響は戦後西ドイツにまで及んでいます。シェンツィンガーの染料工業にかんする『アニリン』は1936年出版ですが、1943年89万部、1951年ドイツで163万部出版されました。彼の二番目のベストセラー『金属』は1939年に出版され、1943年57万部、1951年に93万部が出版されています。ド・クリフが「暴露」(debunking)の技法で個人の英雄化や偶像化の危険に陥るのを避けたのに対し、シェンツィンガーの科学者たちは「常に国家史と世界史の重みに喘いで」います。彼らは「研究界の英雄として、また世界史の柱像として描かれている」<sup>59</sup>のです。1945年以降、それまでの一ナチス大臣の序言にかえておかれた『アニリン』のモットーには「発明が偉大なのではない。偉大なのは発明者だ」とありました。西ドイツの戦後の左派或いは左派自由主義者たちの科学書の代表作家たちには、周知のように、エコロジー・技術問題にかんしてはロベルト・ユンク、社会批判的政治的領域ではベルント・エンゲルマン等があります。他方左右両派の間には、テレビの一般科学番組のスター作家たち(H.フォン・ディトフルト、グルツィメク、ハーバー等)の著書がみられます。

ワイマール共和国左派のルポルタージュやルポルタージュ小説は30年代国際的なスペイン戦争文学の流れへと合流しました。スペイン戦争文学の歴史的意義については、文学史の時代区分という観点からも西ドイツでは十分に認識されていません。またこの時期に散文の領域では、ジャーナリズム、ルポルタージュ、自伝、日記、小説の間に明確な境界線が引けない状況でした。それは丁度多くの場合、芸術、情報、宣伝が掲げる目標が分かち難く結びついているのと似ています。記録、モンタージュ、報告、考察、虚構化はそれぞれ手段として、ときに個別に、ときに体系的に複合されて利用されました。典型的な作家としてここでは、アルトゥール・ケストラー、アルフレット・カントロヴィチ、ボード・ウーゼ、エドゥアルト・クラウディウス、グスタフ・レーグラーの名を挙げておけば充分でしょ

う。これらの諸作品の流れはスペイン戦争当時に途絶えてしまったのではなく、——初版の日付けについてもいえるように——今日にまで続いてきているのです。例えば1955年になってはじめてルートヴィヒ・レンの報告『スペイン戦争』(*Der spanische Krieg*)が、1976年になってグスタフ・レーグラの自伝小説のドイツ語原作『偉大な事例』(*Das große Beispiel*)が、1977年にヴィリー・ブレードルの国際第十一旅団の歴史についての作品が出版されたのです。スペイン戦争にかんする、ボイメルブルク、ドヴィンガー、シュタッケルベルク等ナチ系作家のルポルタージュが1945年市場から姿を消したのに対し、いわゆる転向者、アナーキスト、トロツキストの系列に属さない人々の共産主義的スペイン戦争文学は、東独の文学界で市民権を獲得しています。西独では50年代ドイツ人作家のスペイン戦争文学の受容は殆んど行われませんでした。その結果60年代、70年代の抗議運動や解放運動の流れの中で書かれた社会派ルポルタージュは（例えばギュンター・ヴァルラフ、エリカ・ルンゲ、「作業集団・労働世界の文学」など）、直接ワイマール時代左派の文学伝統に結びついています。ヴァルラフは自分をエゴン・エルヴィン・キッシュの後継者だと表明しています。また今日キッシュの著作は新しいルポルタージュ文学の隆盛の中で新版が出され、新しい読者を獲得し、若い社会批判的ゲルマニストたちの研究対象となっています。

ワイマール時代の伝記文学には、量的にはるかに多くの後継者がいますが、その大部分は、いわゆる「純文学」として認められてはいません。ツヴァイクは今日でも読者と賛同者を得ていますが、文学評論では殆んど扱われません。マックス・フォン・デア・グリューンは彼を出発点にしていますが、本人は全く異った伝統の上にいます。両大戦間のエミール・ルートヴィヒのベストセラーを甦らせる試みはすべて失敗しました。文学的伝記ものは70年代になって漸く画期的なジャンルとして新たな注目をうけることになりました。作表作家たちは殆んど以前に小説家として評価され

ており、新しい物語りの歴史に参加した人々でした。即ち、現代の物語りは、「叙事的プロットの目的論的な性格を破壊し、未来の開かれた地平を過去の歴史の中へ再度導き入れ、全能の語り手を限定された立場の視点におきかえ、完全さの幻想を、不意に現われ<斜めから妨害的に侵入してくるような>細部描写でうち壊すという技法を発展させた……」<sup>60</sup> のです。例えばディーター・キューンは『『N』(1970)のなかで、ナポレオンの実際の生涯に対し幾つかのヴァリエーション——即ち、農民、僧侶、教育者、…… 或いは30才で死亡したNとしてなど——を創り出すことにより』<sup>61</sup> 伝記文学のもつ必然的な完結性に疑問を投げかけています。キューンはここで既に現代小説に通常みられる技法を応用しているのです。統一的なイメージを解体し、実際の生涯を必然的なものとみせない様々な可能性が試されています。キューンの読者は——エリザベート・プレッセンの『コールハース』小説と同様——伝記の成立過程へ引きこまれるのです。伝記はみずからが自己を問い直し、媒体またはひとつの計画という自己の性格、自己の資料を問い直し、さらに感情移入的伝記であることを止めようとして、作家・対象・読者の間の距離について考察して見るのです。20年代のツヴァイクやルートヴィヒのようにひとつの生涯から目的論的首尾一貫性、内的必然性、外的閉鎖性をとり出し、劇的な語り口の背後に（ルートヴィヒは伝記をよく「五幕」に分けていた）、多様な歴史的資料を隠すのではなく、例えば70年代のエンツェンスベルガーは、スペインのアナーキスト、ドゥルッティの伝記で、未解決の矛盾を含んだままの資料を読者に提出しています。「コラージュとしての小説はルポルタージュと演説を、インタビューと宣言をあわせもつ。それは手紙、紀行文、逸話、ビラ、論争文、新聞記事、自伝、ポスター、パンフレットからつくられているのだ。形式上の矛盾はしかし、資料そのものにある裂け目を示しているにすぎない。再構成はパズルに似ていて、資料断片は相互に容易に適合しようとしなない。まさに像の継ぎ目に注目すべきなのだ。もしかしたらそこにこそ真実

が隠れているかもしれないのだ……」<sup>62</sup>。エンツェンスベルガーはこのように不完全で相互に矛盾しあう資料ととりくむことを読者に要請しています。

以上紹介した文学的伝記作品の一部は態々小説と銘うち、隣接し同時に対立するジャンルへの架橋を試みています。それは虚構伝記文学のことで（虚構伝記文学にはトーマス・マンの『ファウストゥス博士』やベルトルト・ブレヒトのシーザー小説等のような非常に異質の性格をもつ先行例があります）。その種の伝記では記録された報告の形式か或いは（一見）ノンフィクション風の伝記が読者に提供されますが、実際は創作された人物の生涯が語られているのです。そのような作品はかつてのアヴァンギャルドのサークルや新左翼系のサークルで書かれています。前者の例としてはヴォルフガング・ヒルデスハイマーの最新の小説『マルポー』が、また後者の作家例としてはアレクサンダー・クルーゲが挙げられます。

70年代の新しい伝記文学は（エンツェンスベルガーのドゥルッティの例のように）60年代後期の政治文学を変形しながらうけついだ部分もあり、また当時の行動主義的集団主義的綱領への反動とみることができる部分もあります。自伝や伝記の記述様式は、60年代の事実や記録への関心を、改めて認識された主観的体験への関心と結合させることができます。ツヴァイクやルートヴィヒの時代と同様、今日でも主人公に芸術家はこと欠きません（オスヴァルト・フォン・ヴォルケンシュタイン、ルソー、モーツァルト、ジャン・パウル、ヘルダーリン、シューベルト、ゴットフリート・ケラー等）。20年代と同様心理主義的契機か社会史的契機が圧倒的に多くみうけられます。新しい伝記文学は最早文学と科学の関係にかんするいかなる論争にまきこまれることもありません。と同時に20年代の「歴史文学」のように広い社会層を含む国際的な広範囲の読者層を獲得することもあります。伝記文学のジャンル史で「現代的」ヴァリエーションとして狭い文壇から評価されても、それを越えて共感を得たり受容されたりす

ることは殆んどありません。従って今日伝記的歴史文学の分野ではひとつの優勢なタイプがあるだけではありません。現代文学的伝記作家（ヒルデスハイマー、ペーター・ヘルトリング、ルートヴィヒ・ハーリヒ、キューン、エンツェンスベルガー等を代表とする）と並び、第二のタイプとして、狭義の文学畑出身者ではなく、歴史的関心と学者的野心をもつ著名なジャーナリストたちや、個人への関心と語りの技巧をあわせもつ著名な歴史学者たちがいます。この種の作家たちは古い伝統の流れのなかにいます。彼らは、過去の学術的伝記の特徴と20年代の「歴史文学」の特徴を交互に巧みにくみあわせています。彼らは一般に形式上の実験をせず、政治観、世界観も固定していません。30年代以降の代表作家としては、第三帝国時代のジャーナリスト、フリードリヒ・ジープルク、スイスの外交官カール・ヤーコプ・ブルクハルト、亡命作家であり、シュテファン・ツヴァイクの遺稿管理人であるリヒャルト・フリーデントール、『シュピーゲル』編集主幹ドルフ・アウグシュタイン、大学教授としてはアルノー・ボルスト、ゴロー・マンがいます（ゴロー・マンは歴史学の同僚を、最早個人にではなく構造にしか関心を向けないと、換言すれば、「デンマーク王子抜きハムレット」しか演じようとしないと非難しています）<sup>63</sup>。

フィリップ・ファンデンベルクの『ネロ』（1981年、初版10万部）等に代表される第三のタイプの伝記文学は既述のように一般向け歴史科学書ブームの一端を担っています。同時にツヴァイクやルートヴィヒと同様の批判を若手ゲルマニストからうけています。マリア・ハーリヒは次のような総合判決を下しました。「イデオロギー批判的にみただけの場合、一般向け歴史科学書は紛れもなく現状肯定的性格を……示している。」その理由として彼女は「啓蒙科学書の本質的特徴の中に、即ち人々に分り易くしたり、心理主義的解釈や写実化、個人主義化の中に、このジャンルの危険性と限界が（潜んでいる）。歴史的人物や現象、事件が<人間の次元で>描かれ解釈されることにより、それらは同時に個人的モチーフや個人的特質、個人的

決断に根ざしたものとなる。歴史的事象は私的な、個人的な原因やモチベーションへ縮減されてしまい、政治的社会的次元は完全に後退してしまう。……記述上の〈クローズ・アップ〉や人物への焦点集中は……この種の多くの本で、描写された事象をより大きな政治的社会的関連性の中に位置づけることを忘れている。」<sup>64</sup> この批判が「この種の多くの本」に該当するということはしかしすべてに該当することではなく、従って「本質的特徴」とはいえず、むしろ原則的に回避されうる特徴をいいあてていることになるでしょう。そう考えれば歴史的・政治的にみて承認可能な啓蒙歴史書の型もありうるでしょう。しかし他方で現実には読者が、過去の歴史空間を歴史的・政治的な方向決定のための参考の空間としてではなく、心理的・人間的な可能性や「個人的モチーフや個人的特質、個人的決断」の可能性の空間とみなす限り、即ち、現代の歴史的・集団的諸関連性の中とは異質の、アイデンティティ確認の場としてみなす限り、「私的趣味」的伝記文学が消え去ることは考えられないでしょう。

以上をまとめると次のようになります。19世紀を通じドイツでは芸術と科学が対立概念として捉えられていきました。そのさい文学は芸術としてのみ存在し、芸術は自己目的な営みとされました。芸術としての文学は戯曲・叙事文芸・抒情詩という古典的三分野に限定され、仮象や遊びの世界として定義され、休日に属するものとされ、個人主義や個性、非合理的直観というカテゴリーと結びつけられました。科学はその対立極として捉えられ、平日に所属するものとされ、合理的方法の真髄、客観的現実認識の担い手、技術文明発展の推進力とされました。文学と科学の実際の関係が19世紀においてもこの観念に部分的には合致していなかったという事実は、そのような概念がイデオロギー上妥当性を獲得することを否定しませんでした。しかし第一次大戦の物量戦や宣伝戦は上述の観念に深刻な影響を与えずにはいませんでした。科学と技術は軍事上の大量殺戮の道具を開発しました。科学的技術的進歩と現実の社会的貧困の極端な対立はそれへ

の答えを要求したのです。個人主義という伝統的な自明の理念は、文学と科学の自律性を前提とする基本構想と共に危機に直面しました。科学と同様、文学も、目標設定や機能が、それぞれ所属する社会制度や文化制度とは無関係に存在しているのではないことが証明されました。この認識から必然的にそれらの政治的社会的責任を問う声が高まりました。と同時に世界観や政治観に基づく分裂も始まり、そこからさらに間接的に影響され、非政治的或いは反政治的態度を強調する人々もでてきました（この分裂は後に30年代、第三帝国のユダヤ人科学者や反ファシズム科学者の追放或いは亡命により尖鋭な形をとることになりました）。第一次世界大戦後文学の領域では、自律的純文学と機能的非文学という二律背反論が疑わしいものとなりました。伝統的芸術は映画やラジオという新しい大衆メディアを前にして、その「アウラ」を失いました。文字芸術はラジオ放送の聴覚性や映像の視覚的語りと競争することになりました。映画はより強く感情に訴え、感情移入を容易にしました。そして従来小説が有していた機能を引きうけたのでした。本をメディアとする文学では虚構と事実（ノンフィクション）の境界は流動的になり、「文学性」の規定概念が失われました。虚構という幻想の破壊や記録主義、統計や考察がフィクションのジャンルへ浸透していきました。随筆、モンタージュ、コラージュが伝統的な語りの形式のもつ閉鎖性を破ったのでした。感情移入演劇の閉鎖的形式はうちこわされたのでした。純文学の作家たちは「事実のジャンル」ととりくみ、文学的野心や慣習、技法をその中へもちこみました。純文学系出版社はそれらの作品を読者やアクチュアルな文芸批評界へと媒介しました。歴史的・心理主義的傾向をもつ伝記、政治的・社会的傾向をもつルポルタージュ、技術的・自然科学的傾向をもつ啓蒙科学書が、戦後の共和国の広汎な読者層にとり新しい意味をもち得たジャンル形式の典型的な三例です。それらは戦前の文学の潮流における、印象主義や新ロマン派・新古典主義的伝統に、或いは自然主義や批判的リアリズムの伝統につながる部分をもっ



ていて、「映画的」技法もとりいれていきました。危機意識に満ちた時代における純文学的伝記は、歴史上の人物の生涯のなかにアイデンティティを求める読者の傾向や、社会的役割を超越し、永遠に「人間的なるもの」を発見しようとする読者の願望に答えようとしたのでした。それに対しルポルタージュや同時代にかんする啓蒙科学書及びそれらの読者は、自分たちをとりまく時代環境のなかで集団として被る変化のプロセスや時代特有の具体的な「諸関連性」を問題にしようとしたのでした。これらの「事実のジャンル」は様々な政治上のまたは世界観上の傾向をもっています。そこから出発した文学の展開は、幾つかの変容をうけながら今日にまで続いており、60年代70年代に部分的には新形式をうみ出しながら、拡がり強化されていっています。そこでは科学、時事評論、虚構文学が交流し相互に影響を与えあっています。それらの諸形式は文学ジャンルのスペクトルムのなかで、従来のどの形式よりも、伝統的な叙事文芸・戯曲・抒情詩という三分類の仕方からはみ出たものであり、同時に他の芸術やメディアのジャンル形態と分ちがたく絡みあっています。物語と同様、ルポルタージュ、啓蒙科学書及び伝記は、新聞や本という活字印刷メディア以外に、ラジオ、映画、テレビのような聴覚的、視覚的表現形式を発見したのです。映画やテレビのシリーズ番組ものが本をもとにして作成されるように、本も映画やテレビのシリーズものをもとにして書かれています。今日の物語り作家たちは同一のストーリーと登場人物を使い、活字、ラジオ放送、映画というメディアのための作品を構成しています。虚構の語りの形式はノンフィクションの形式を模倣したり、或いは現実の体験や自伝的内容をとることにより自己正当化を行っています。ノンフィクションの報告形式は、虚構や文学的文体の技法を利用しています。伝記や自伝を書く作家たちは彼らの行為のもつ「創作的」虚構の面を知っており、同時に（アメリカ人ヘイドン・ホワイトに続く）歴史理論家たちは歴史学のもつ語りの機能について考察しています（その際、それを意図的に受け容れるか、或い

は社会科学の経験的方法を手段にしてそれを克服しようとするかの違いはあります)<sup>65</sup>。

科学にかんする研究であることを敢えて望もうとはしないような文学的啓蒙科学書と、文学理論研究でありながらその表現手段が文学的関心を惹き、文学として承認され同時に文学批評の対象へ編入されるような理論科学的な文学テキストとの境界は、受容者にとっても、また部分的には書き手にとっても流動的になっています。例えば70年代西独でフランス現代文学を代表したのは理論家や哲学者（バルト、フコー、ラカン、デリダ、クリステヴァ、ソレルス等）でした。西独の一般読者層や文学批評が好む対象の中にはここ数十年來、フランクフルト学派の代表者たちや、ガルディニー、ラーナー、キューング等の神学者、カール・フォン・フリッシュ、コンラート・ローレンツ、アドルフ・ポートマン等の生物学者、エーリヒ・フロム、アレクサンダー・ミッチャーリヒ、H. E. リヒター等の社会心理学者が含まれています。同様に我々は現代アメリカ文学の中に、「黒い伝記」とよばれる作品や、婦人解放運動啓蒙書、(レイチェル・カーソンの『沈黙の春』のような)エコロジー啓蒙書、或いはデイヴィッド・リスマンやヴァンス・パッカーの社会科学書、そして当然のことながら、トルーマン・カポーティやノーマン・メイラーの「事実小説」も含めています。このような一見非文学的な諸形式の多様性は、歴史的に変化した文学的関心の対象として注目されてきたものであり、また以上紹介したような文学的発展が現われて以来それに影響をうけてきたものです。即ち、その代表例としてここでとりあげたように伝記、ルポルタージュ、啓蒙科学書が、文学内ジャンルとして既述のような形で定着し、読者や敵対者をうみ出して以来のことなのです。ジーゲン大学に提出した伝記に関する教授資格請求論文の中でヘルムート・ショイアーは最後に、ロベルト・ムージルの『特性のない男』(1930)の主人公ウルリヒの問いを引用しています。それはまだ第一次大戦前の文学と科学の二律背反論を含んだものですが、

既にそれに最早満足できないところからくる問いなのです。「真実を欲する者は学者になる。主観性を自由に繰り上げた者はおそらく作家になるだろう。しかしその中間のなにものかを望む者は何をすべきなのか?」<sup>66</sup> この問いにはその後多くの時代特有の答えが出されてきました。しかし可能な、そして特に特徴的な答えのひとつは、当時既に次のようなものでした。「彼が書くものは例えば、伝記のようなもの、ルポルターージュのようなもの、啓蒙科学書のようなものだろう。」

#### 注

- 1 これは、1980年2月テキサス大学（オースティン）で開催された文学と歴史の関係についての学際的学会での講演のための原稿で、1979年ヒューストン／テキサスで執筆され、その後カナダ大学（ウォータールー）、ベルリン自由大学、ウィーン大学、関西大学（大阪）で講演された。今回ヴァルター・ゾーケル教授記念論文集刊行にさいし、印刷用に手直しされた。*Festschrift für W. H. Sokel*. Niemeyer Verlag, Tübingen 1983. しかし私自身が編集に携ったり（LiLi, Reihe Siegen, Reihe Q 等）、或いは私がジューゲン大学で担当した諸論文への言及は避けるわけにはいかなかった。そのような事情や、本論のテーマの大きさと紙数制限からくる問題などについて読者の方々の御配慮を願えれば幸いである。その点にかんして、口頭発表のさいは、その後の討論で少なからず補われた。
- 2 Georg Lukács : „Reportage oder Gestaltung?“ (1932) 引用は次による。Lukács : *Schriften zur Literatursoziologie*. Ausgewählt und eingeleitet von Peter Ludz. Neuwied 1961, S. 128.
- 3 *Historische Belletristik. Ein kritischer Literaturbericht*. Hrsg. von der Schriftleitung der *Historischen Zeitschrift*. München/Berlin 1928.
- 4 この問題についての文献表示は次の箇所を参照。Berthold Emrich : „Literatur und Geschichte“. In : *Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte*, 2. Aufl. Bd. 2, hrsg. von Werner Kohlschmidt und Wolfgang Mohr. Berlin 1965.
- 5 Helmut Scheuer : *Biographie. Studien zur Funktion und zum Wandel einer literarischen Gattung vom 18. Jahrhundert bis zur Gegenwart*. Stuttgart 1979, S. 231. 以下の論考は部分的には以前のショイアーとの対話の継続であり、同時に、ジャンル史的考察と時代史的考察を結合しようとする試みでもある。
- 6 Friedrich Sengle : *Biedermeierzeit. Deutsche Literatur im Spannungsfeld*

*zwischen Restauration und Revolution 1815-1848*, Bd. 2 : *Die Formenlehre*.  
Stuttgart 1977, S. 278 参照.

- 7 Ebda.
- 8 Alexander von Humboldt : *Kosmos*, Bd. 1, Stuttgart 1869, S. 32f.
- 9 フンボルトの *Ansichten der Natur* (1808) 3. Aufl. (1849) への彼自身による序言参照。引用は次の箇所による ; Ulf Diederichs : „Annäherungen an das Sachbuch. Zur Geschichte und Definition eines umstrittenen Begriffs.“ In : *Kindlers Literaturgeschichte der Gegenwart. Die deutschsprachige Sachliteratur*. Hrsg. von Rudolf Radler, München/Zürich 1978, S. 9.
- 10 Alexander von Humboldt : *Kosmos* Bd. 1. Stuttgart 1869, S. VIII 参照.
- 11 ファルンハーゲン・フォン・エンゼ宛の1841年4月28日付のフンボルトの一通の手紙より。引用は Sengle (注6参照) S. 290 による。
- 12 この記述は, „Eine Epoche des Übergangs“. In : *Jahrhundertende—Jahrhundertwende*, I. Teil. (=Neues Handbuch der Literaturwissenschaft Bd. 18 Wiesbaden 1976, S. 17) の初めにある私の論文からの引用である。その背景にあるのは, 科学技術の発展と共に生じ, 「H. G. ウェルズやエドワード・ベラミー, ジュール・ヴェルヌ, クルト・ラスヴィッツ, レイモンド・ラッセルやパウル・シェルバートなどの名前から」連想されるような, 「物語形式のスペクトルムの多様性と幅広さ」である。空想科学小説や未来小説が現在もつに至った重要な役割(それは歴史小説のもつ役割を凌駕している)については現段階では詳論できない。また空想科学小説と, 特に未来学的要素をもつ自然科学的技術的科学書との関係についても同様である。ここにある注がその方向でさらに補充されるべきであろうことを記しておく。
- 13 ドイツ自然主義の文学または美学の「科学化」への要請が, 「或る種の, 美学上の所有物維持, 『芸術』としての作家個人の生産物防御」という考えと結びついていたこと, またその結びつきのあり方については次の本でも述べられている。Jutta Kolkenbrock-Netz : *Fabrik, Experiment, Schöpfung. Strategien ästhetischer Legitimation im Naturalismus*. Heidelberg 1981 (Reihe Siegen Bd. 28) S. 333.
- 14 Siegfried Kracauer : „Die Biographie als neubürgerliche Kunstform.“ (1930)参照。引用は次による。Kracauer : *Das Ornament der Masse. Essays*. Frankfurt/Main 1963, S. 79.
- 15 Ebda. S. 77.
- 16 Ebda.
- 17 Ebda. S. 75.
- 18 Dietrich Scheunemann : *Romankrise. Die Entstehung der modernen*

- Romanpoetik in Deutschland*. Heidelberg 1978 (=medium literatur Bd. 2) 参照。
- 19 *Die literarische Welt*. 1926年2月26日号参照。アンケートやその回答は、伝統的な上下関係が必要だとされている箇所さえ価値観が変化したことの証明となっている。
- 20 Emil Ludwig : *Geschenke des Lebens. Ein Rückblick*. Berlin 1931, S. 351.
- 21 Eckart Kehr : „Der neue Plutarch. Die ‚historische Belletristik‘, die Universität und die Demokratie.“ In : *Die Gesellschaft. Internationale Revue für Sozialismus und Politik*. Jg. 7. 1930 参照。
- 22 Hilde Domin: *Von der Natur nicht vorgesehen—Autobiographisches*. München 1974, S. 93.
- 23 ルートヴィヒに関しては彼の自伝 *Geschenke des Lebens* (注20参照)、追悼集 *In memoriam Emil Ludwig*. Moscia 1950、及び文献集 *Books by Emil Ludwig*. Moscia 1947—全27ヶ国語に亘り、外国での出版物も記載されている—を参照。国際的に著名な政治家、或いは知識人と彼の文通に関しては H. Kreuzer : „Von Bülow zu Bevin. Briefe aus dem Nachlaß Emil Ludwigs.“ In : *Rice University Studies*. vol. 55, Nr. 3, Houston/Texas 1969 参照。ジャンルとしての伝記及びルートヴィヒのジャンル史的位置づけに関しては(注5・ショイアー以外)、特に次の本を参照。Jan Romein : *Die Biographie. Einführung in ihre Geschichte und Problematik*. Bern 1948 (=Slg. Dalp 59) ; Friedrich Sengle : „Zum Problem der modernen Dichterbiographie“ (論文)。In : *Deutsche Vierteljahrsschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte*. 26, 1952.
- 24 Leo Löwenthal : „Die biographische Mode“. In : *Sociologica. Aufsätze, Max Horkheimer zum 60. Geburtstag gewidmet*. Frankfurt a. Main 1955, S. 374.
- 25 Kreuzer (注23) S. 95 参照。
- 26 Ludwig : *Geschenke des Lebens*. (注20参照), S. 732.
- 27 Ebda. S. 731.
- 28 Ebda. S. 735.
- 29 Ebda. S. 745.
- 30 Michael Kienzle : „Biographie als Ritual. Am Fall Emil Ludwig.“ In : *Trivalliteratur*. Hg. v. Annamaria Rucktäschel und Hans Dieter Zimmermann. München 1976 参照。更にショイアー(注5参照)も S. 207-217及び他数カ所而言及。St. ツヴァイクとルートヴィヒが「不安にされた中産階級に育つべきであった民主主義的共和主義的意識に宿命的な作用」を与えたというショイアーのテーゼ(Scheuer S. 163)に対し私は、彼の浩瀚な著作の優秀さを認めながらも些か疑念を抱いている。彼の著作は私が契機をつくり、ジーゲン大学で教授

資格請求論文として援助をうけたものである。キーンツレの論についても私の反論は主として彼の研究のもつ文学批評的側面へ向けられているのではない（序に、236頁と247頁にみられるひとつの誤謬を指摘しておきたい。それは既に1922年に暗殺されたヴァルター・ラーテナウ宛に、1926年7月31日付で、元宰相の中央党政治家ヨーゼフが書いたとされる手紙の件である）。方法論的に問題だと思えるのは、イデオロギー批判的テキスト分析から思弁的な方法で結論を出すやり方であり、そこではツヴァイクとルートヴィヒの伝記文学がファシズムを助長する作用をもったと主張されている。それは、不当に仮定された作用であり、当時の非ファシズム的読者は今日の独文学の批評家と同様、そのような作用に対し免疫をもっていたであろうことは推測されうる。具体的読者とテキストとの関わりは、批評家がテキストのみから必然的に結論づけることができるものではない。就中その批評家が、自分自身において観察した読者としての反応を、他の人々には生じ得ないと考えるときには一層そうだといえよう。また彼が、読者うけのよいことから機械的に読者の誤った意識を推論し、レマルクのような「大衆作家」（S. 242）を見下しているような尊大な姿勢も、私には場ちがいに思えるのである。

- 31 ルートヴィヒの *Geschenke des Lebens* のなかの或る統計によると、1926年—1930年の間の「アメリカ」（恐らく合衆国のことであろう）でのビスマルク伝記の版数は104,000部であり、ドイツでは54,000部、更にナポレオン伝記は、「アメリカ」で508,000部、ドイツで189,000部となっている。
- 32 例として Niels Hansen : *Der Fall Emil Ludwig*. Oldenburg 1930. S. 148 及び S. 172 参照。そこでルートヴィヒは「裏街の指導者」とされ、「ラジカルな平和主義団」の精神を広める者とされている。ジークフリート・トレピチュはその自伝 *Chronik eines Lebens* (Zürich 1951, S.464) の中で、ルートヴィヒは「ナチから最も憎まれ、最も人気のあった作家である」と書いている。
- 33 次のローヴォルト出版社の二冊の本を参照。 *Emil Ludwig im Urteil der deutschen Presse*. Berlin 1928, 及び *Emil Ludwig im Urteil der Weltpresse*. Berlin 1928. 更に Kreuzer (注23) の書簡集からの引用。ルートヴィヒに賛同する文芸批評家として、H. ヘッセ、St. ツヴァイク、ユリウス・バープ、エルンスト・リサウアー、ヴォルフガング・ゲーツ、イーヴァン・ゴル、ザムエル・ゼンガー、オットー・フラウケ、O. M. フォンタナ、H. E. ヤーコブ、ヴィリー・ヘルパ等がいた。国際的な文芸欄でのルートヴィヒへの評価は最高級のものがあった。彼は単に「天才」を描写する人物でなく、自身が「天才」として讃えられている。外国での彼の名声については以下の彼のロンドン、パリ訪問の際の新聞報道を参照。「ヴィルヘルム二世とナポレオンの英訳は、著者のロンドン到着時、数多くの英国政治家や作家、名士たちの机上にあった。個々の貸本業者は何百冊と購入し、新聞はこれらの本にこぞって最高の敬意を表し、その結果

ルートヴィヒはたちまち、英国で最も有名な存命中のドイツ作家となった。ルートヴィヒは……無数の意見表明やインタビュー、講演、新聞記事を通じてドイツ共和国のために友人を獲得し、また何十万もの人に共和国を理解させようとした。英国の公的社会はルートヴィヒと接して初めて、今まで全く未知であったドイツと個人的な関わりを幾重にももったのであった。」—「エミール・ルートヴィヒの到着が告げられた瞬間どこでも予想外に多くの歓待の嵐がまきおこり、いつもロンドンで生活しているこのドイツ人にとってさえ、びっくりするほどのことであった。……ロンドンですごした数週間、ルートヴィヒにはチャーチル、ボルファ卿、グレイ卿、ロイド・ジョージ、ラムゼイ・マクドナルド等の政治家や、バーナード・ショウ、H. G. ウェルズという文学者と会える機会が与えられた。」—「ルートヴィヒは1927年6月「単なる一私人としてロンドンへ来たのであったが、彼の……訪問は……—予想外に、また望みもせずに—文化的事件となり、共和国ドイツにとり倫理的大成功となったのであった。」—「世界中どこにも（パリほどには）、世界的名声に押印し、真実その名声に到着したのだということを確認するにふさわしい場はないであろう。このことはエミール・ルートヴィヒの場合も明らかであり、彼の意志にはかかわりなく、数多くの歓迎会やインタビューの間をひきまわされ、好意と寵愛に窒息せんばかりであった。」 *Emil Ludwig im Urteil der Weltpresse* S. 22f. 及び S. 44f. 彼の記述様式にかんし、自由主義的新聞や（国際的な）社民主義的新聞の批評には、次のような指摘が特徴的である。即ち、論じられる作品がその都度、（専門学者の伝記と異なり）小説やドラマのように好奇心をそそり、しかも（学術的伝記のように）完全に事実に立脚しているということ、またギリシャ悲劇や叙事詩のように作用するが、その実、大部分具体的史実や、巧みに組合わされ時代的に整理された資料からの引用（作家はその背後に隠れてしまっている）で構成されているということである。この両面の結合が賛辞の対象となっている。そこではカーライル、プルタルコス、リットン・ストレッチャーとの比較がくり返しみられ、ゲオルク・ブランデス、マコーリー、サンドバーグやエマーソンとの比較もみられる。映画技法や印象主義との親近関係もくり返し指摘されている。主人公たちの行為はその人物の背後にかくれ、具体的環境はその心理描写の背後にかくれてしまっていることは見おとされていないが、多くの場合肯定されている。各主人公の「最も内なる心の動き」を「理解させる技法」への賛辞や、作家の「偏見のなさ」（ナポレオンの場合の民族的偏見のなさ、H. St. チェンバレンの *Goethe* 等と比較しての、「党政策や人種差別政策的な」偏見のなさ等）の認識が評価の中心である。「凡庸な天才崇拜」との相違は強調されている。「彼は天才のなかにいつもひとりの人間をみる。」—「ルートヴィヒは先ず自然な形で人間らしさを描き、それからその偉大さを描く。」（*Weltpresse* S. 79及びS. 57）、彼の著作が果たした役割や、想像可能な影響に関していくつか引用してみよう。「あらゆる階層の人々が……ル

- ートヴィヒを読んだ。朝、電車で会社に向かう人々のひざには彼の本が広げられていた……」—「ルートヴィヒは同時に、ヨーロッパや世界中の読者の共感を得た。何故ならば彼はその心理の探究を通じて、彼が描くドイツ人にそなわっている最も普遍的なるもの、最も人間的なるものを正しい光のもとに照らし出したからである (*Weltpresse* S. 39, 及び S. 50). 伝記的隨筆 *Genie und Charakter* にかんして *Berliner Lokal-Anzeiger* は、それが「忙しい大都会の人間にとりオアシス」であり、あたかも「我々の早いテンポですぎ去る時代」のために創作されたかのように述べている (*Emil Ludwig in der deutschen Presse* S. 26).
- 34 歴史家ヴィルヘルム・シュスラーは、*Historische Belletristik* (注3参照) というパンフレットのながきで、新しい伝記作家たちの「民主的・社会主義的傾向」を非難し、彼らを「ビスマルクが建設した旧帝国の、嘲笑的で不当な、それ故に理解に欠け、いまだに憎悪にみたされた敵対者である」と称した。新しい伝記に対する歴史家たちの攻撃は、エッカルト・ケーアにいわせると、間接的に「ワイマール憲法の政治的民主主義」を狙ったものであった (注21 S. 184参照)。更にオットー・ヴェストファールの *Feinde Bismarcks* (München 1930, S. 19) の中のルートヴィヒ批判も参照。「そのようにみえてくると、ルートヴィヒが彼のビスマルク像を造り出したところの、『ワイマール連合政府の基盤』はじつに奇妙なものである。」国際的な論評は、ルートヴィヒが「共和国のために多大な貢献をし、彼の「歴史的事業は、共和主義的・民主的精神を確立するのに」適している」という点で一致していた (*Weltpresse* S. 76f. 参照)。
- 35 Franz Schonauer: *Deutsche Literatur im Dritten Reich*. Olden/Freiburg/Breisgau S. 162 からの引用。
- 36 そのようにファイト・ファレンティンは *Frankfurter Zeitung* で評価している。Scheuer (注5) S. 161, S. 277 参照。
- 37 Franz Schonauer: „Autobiographische und biographische Literatur“. In: *Kindlers Literaturgeschichte* (注9) S. 406 参照。
- 38 私が編集した „Reihe Q. Quellentexte zur Literatur- und Kulturgeschichte“ (Königstein/Ts. 1978) 第6巻にある Wendel 著の Danton-Biographie 再版に収められたショイアーのあとがき参照。
- 39 次の論を参照。Maria Harig: „Beobachtungen zum historischen Sachbuch der Gegenwart.“ In: *Sachliteratur*. Hrsg. v. H. Kreuzer. *Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik (LiLi)* H. 40. Jg. 10. 1980; Wolfgang Birkenfeld: „Abschied von der Krise? Zur Situation der Geschichte am Ausgang der siebziger Jahre“, In: Helmut Kreuzer und Karl Walter Bonfig (Hrsg.): *Entwicklungen der siebziger Jahre*. Gerabronn/Crailsheim 1978.
- 40 注目すべき(虚構の)演説「ワイマールで発言されなかったこと」(In: *Zukunft*



1919年7月12日号)等参照。ルートヴィヒ自身1928年の短い自伝の中で政治的成長を次のように語っている。「私の人生形態は政治的にみていつも革命的ではなかった；革命的ではなさすぎた。戦争末期私は或る階級の貧弱な姿勢に対し、次第に彼らの気質を疑い始め、そのことは私に、特権階級の時代は過ぎ去らねばならないこと……を教えた。保護され政権を握る少数者の愚かさとな名譽欲のための犠牲となり、罪もなく戦死し飢餓につきおとされる人々を目の前にして、このヨーロッパ的運命は私を特に社会問題において急進的な立場へと変えていった。そして私は悟った。今日著述家は、ヴォルテールのいうところの僅かな理想を推進すること以上によいことをすることはできないのだと。その理想の実現のため、改革の嵐が世界中をかけめぐっているのだ。そのために韻文を利用しようと、新聞の社説、物語、或いは舞台を利用しようと同じことである。……別の形式で私は、そこで利用される今日の技術が、英雄主義を縮出す戦争に反対することを試みた。ヨーロッパはより高い次元の祖国となった、飛行機がベルリンとパリを隣街にして以来、ヨーロッパの戦争は市民間の戦争となった。私は国民的次元及びヨーロッパ的次元での幾つかの理性的な委員会に属している。しかしかなる党派や宗派にも属していない。ユダヤ人として生まれ、数十年形式的にキリスト教に所属したあとでラーテナウ殺害の日々、私は迫害の時代私の種族の立場にたてるよう、キリスト教から脱退した。」(*Weltpresse* S. 9) ルートヴィヒは戦後スイスの「自由社会党」へ加入した。

- 41 Kurt Tucholsky : „Das Buch vom Kaiser“ (1925) 参照。In : *Gesammelte Werke* Bd. 4, 1925—26. Reinbek 1975, S. 296ff. トウホルスキーは、その本の評価を明確に「その影響力」によるものと記している。彼は「誰がこの本を読んでいるか」を示した「多くの手紙」を証拠としてあげている。即ちそこには「そのような問題と元来関わりをもたなかったであろうような人々」や「婦人」、「我々には決して手が届かないような層……」全体が含まれていたのである。——「少なくとも考えこまずにはいないような読者は皆無であろう。——そしてこのことは多くの人々にとり大変な楽しみをもつのである。」——外国の論評は、『ヴィルヘルム二世』のみでなく『ビスマルク』にも民主的な影響力を認め、時には遙かに誇張した期待を抱いていた。「この皇帝像が与える心理的作用は、共和主義的ドイツ政党の全綱領とドイツ左派ジャーナリズムの活動全体と同様の重みをもつことだろう。」——「もし今世紀初め、まさにルートヴィヒの二冊の本、『ヴィルヘルム二世』と『ビスマルク』のような書物が著わされていなかったら、過去20年間どのように違った様相を呈してきたであろうかと、我々は深い哀しみの念で自問せねばならないだろう。」(*Weltpresse*, S. 81, S. 72, 更に S. 21, 31, 34f, 75ff. 参照)。ルドルフ・オルデンは『ビスマルク』についてウィーンの或る新聞で次のようにささげ解説している。「私が多大な作用を、政治的、政治教育的作用を期待している作品を発表したルートヴィヒに、私は感謝しなければならない。

その作用力が有害な観念を敗北させ、有益な努力を築いていき、ドイツ共和国建設への最も有意義な貢献となることを期待する。」(Weltliteratur S. 69)

- 42 Kurt Tucholsky : „Juli 14.“ In: *Gesammelte Werke Bd. 7 : 1929*. Reinbek 1975, S. 139—146「この本はひとつの行為である。ルートヴィヒがその行為を引きうけたことは二重の意味で感謝に値する。——彼はいかなる非難の波を被ることになるか知っている。彼は市民として信念に従う勇気をもつ男だ。」(S.145) トゥルホルスキーは、ルートヴィヒが『1914年7月』で戦争責任を内閣にのみ帰してしまい、間接的に、それに先行した諸般の流れや戦争に積極的だった大衆を免責したことを誤っているとみなしたにもかかわらず、上のように判断している。「ドメラとレマルクをあわせた」の件が持つ比重は、トゥホルスキーの両者への賛辞を考えに入れてはじめて明らかになる。ドメラに関しては次の箇所を参照。Bd. 7. *Gesammelte Werke* 1975, S. 284ff.
- 43 従って『1914年7月』(Hamburg 1961) と『ヴィルヘルム二世』(München 1964) の新版が、進歩主義的伝統にたつ歴史家、フリッツ・フィッシャーとその弟子イマヌエル・ガイスにより、理解あるあとがきを添えて出版されたことは有意義であった。『ダヴォスの殺人』は1936年アムステルダムで出版できたのみであって、スイスでは1945年に初めて出版され、ドイツでは今日でもまだ知られていない。
- 44 しかし同時にルートヴィヒの唯美的、心理主義的態度が政治的に疑惑をもたれる姿勢へ通じたことは否定されるべきでない。その一例が *Gespräche mit Mussolini* (1932) である。ルートヴィヒは、伝記作家が歴史的に距離を保って「専制君主」に対するのと同様に、ドイツの状況への地理的距離を理由にイタリアの独裁者に、中立的な、「人間的」関心をもって会見できるという誤った考えを抱いていた。そのような発言に対するキーンツレ(注30参照)の批判は(Kienzle S. 237参照)、第三帝国時代ルートヴィヒの反ファシズムがみせた反ドイツ的態度への変化に対するドイツ人亡命者たちの批判と同様、正当である。当時彼はより適切な時代史的・社会史的解説の思考概念の不足のため、ヒトラーとNSDAPの成功を、ドイツの民族的性格とドイツ民族史の基本傾向から説明しようとしていた。ルートヴィヒの政治的姿勢を唯美的・心理主義的姿勢から区別することにかんしては、ヴィリー・ミュンツェンベルクの1939年8月23日付の手紙を参照。(彼の共産主義的書籍組合 „Universum Bücherei für Alle“ にルートヴィヒも作家として加入していた。) 手紙の引用は Kreuzer (注23参照) S. 113 による。
- 45 現代のルポルターージュとその「古典作家」エゴン・エルヴィン・キッシュについては次の本を参照。Christian Ernst Siegel: *Die Reportage*. Stuttgart 1978 (多数の文献紹介あり)。Ders.: *Egon Erwin Kisch. Reportage und politischer Journalismus*. Bremen 1973 ; Erhard H. Schütz : *Kritik der literarischen Reportage. Reportagen und Reiseberichte aus der Weimarer Republik*

*über die USA und die Sowjetunion.* München 1977 ; Theresa Mayer-Hammond : *American Paradise. German Travel Literature from Duden to Kisch.* Reihe Siegen Bd. 18. Heidelberg 1980. 更にフリードリヒ G. キュルビッシュ編集の1880年来の社会ルポルターージュ史のアンソロジーを参照：*Der Arbeitsmann, er stirbt, verdibt, wann steht er auf? Sozialreportagen 1880 bis 1945.* Berlin/Bonn 1982, *Dieses Land schläft einen unruhigen Schlaf. Sozialreportagen 1918—1945.* Berlin/Bonn 1981 ; *Erkundungen in einem unbekanntem Land. Sozialreportagen von 1945 bis heute.* Berlin/Bonn 1981. キュルビッシュも証明しているように20年代の社会派ルポルターージュの前身がドイツ労働者運動にあるということは、啓蒙主義から三月革命前夜に至るまでの文学的に承認された紀行文学（ゲオルク・フォルスター等）にその前身があるという事実と並び疑う余地のないものである。この事実を認めたらうえでもなお、ヴィルヘルム帝政時代の大戦前夜の文学にたいし、ワイマール共和国の時代、ルポルターージュにとってもジャンル史上の一変革期が訪れたということは否めない事実である。その変革は画期的なもので、その結果、20年代ブルジョワ文学評論の中で、常に異論を伴ないながらも文学的にルポルターージュが承認されていったのである。

- 46 「新即物主義」については次の諸論を参照。Horst Denkler : „Die Literaturtheorie der zwanziger Jahre. Zum Selbstverständnis des literarischen Nachexpressionismus in Deutschland.“ In : *Monatshefte* (Wisconsin) 59/1967 ; ders. : „Sach und Stil, in Theorie der ‚Neuen Sachlichkeit‘ und ihre Auswirkungen auf Kunst und Dichtung.“ In : *Wirkendes Wort* 18/1968 ; Helmut Lethen : *Neue Sachlichkeit. Studien zum Weißen Sozialismus.* Stuttgart 1970 ; Karl Prümm : *Die Literatur des Soldatischen Nationalismus der 20 er Jahre (1918—1933). Gruppenideologie und Epochenproblematik, 2 Bde.* (=Theorie Kritik Geschichte Bd. 3/1 u. 3/2). Kronberg 1974 ; Wolfgang Rothe (Hrsg.) : *Die deutsche Literatur in der Weimarer Republik.* Stuttgart 1974 ; Jost Hermand und Frank Trommler. *Die Kultur der Weimarer Republik.* München 1978 ; H. Kreuzer : „Kultur und Gesellschaft in der Weimarer Republik.“ In *Text und Kontext*, Sonderreihe Bd. 11.: *Kultur und Gesellschaft in Deutschland von der Reformation bis zur Gegenwart.* Hrsg. v. Klaus Bohnen et al. Kopenhagen/München 1981 (表記以外の文献も含まれている.)
- 47 Karl Jaspers : *Die geistige Situation der Zeit.* Berlin 1931, S. 29.
- 48 20年代ドイツで出版された同書のひとつにつけられたキッシュのまえがき参照。Reed : *Zehn Tage, die die Welt erschütterten.* Wien/Berlin 1927 (S. V—XXIII).

- 49 Kisch: „Reportage als Kunstform und Kampfform.“ 参照. In: *Reporter und Reportagen. Texte zur Theorie und Praxis der Reportage der zwanziger Jahre. Ein Lesebuch*. Hrsg. v. Erhard H. Schütz. Gießen 1974, S. 45ff.
- 50 Ebda. S. 47.
- 51 Tretjakov: „Brief an Kisch.“ In: *Internationale Literatur* V/4, 1935, S. 5. 引用はジーゲル (注45参照) S. 9 (1973), S. 89 (1978) による.
- 52 Ernst Glaeser (Hrsg.): *Fazit. Ein Querschnitt durch die deutsche Publizistik*. Mit einem Nachwort von Helmut Mörchen. Reihe Q, Bd. 4. Kronberg 1977, S. 7.
- 53 Ernst Bloch: „Künstliche Mitte.“ In: *Die Neue Rundschau* 1930; 引用は Siegel: *Die Reportage* (注45参照) S. 76 による.
- 54 Ernst Rowohlt: *Von Paul Scheerbart zu Siegfried von Kardorff*. Berlin 1930; 引用はディーデリクス (注9参照) S. 18 による.
- 55 私が編集した次の複製版を参照. Reihe Q: Bd. 1. Köppen: *Heeresbericht*. Mit einem Nachwort von Michael Gollbach. Kronberg/Ts. 1976; Bd. 3 Reger: *Union der festen Hand*. Mit einem Nachwort von Karl Prümm. Kronberg/Ts. 1976; Bd. 5 Brunngraber: *Karl und das 20. Jahrhundert*. Mit einem Nachwort von Thomas Lange und Karl Ziak. Kronberg/Ts. 1978.
- 56 *Linkskurve* 1932年の幾つかの号に収録されている論争を参照; 抄録は特に *Romantheorie. Dokumente ihrer Geschichte in Deutschland seit 1880*. Hrsg. v. Eberhard Lämmert et al. Köln 1975.
- 57 Lämmert (注56) S. 276 参照.
- 58 啓蒙科学書の概念についてはディーデリクス(注9)及び私が編集した LiLi-Heft 40 *Sachliteratur* (注39) の私の巻頭論文 S. 7 参照.
- 59 Thomas Lange: „Literatur des technokratischen Bewußtseins. Zum Sachbuch im Dritten Reich.“ In: *LiLi* 40 (注39) S. 67. そこにはシェンツィンガーの出版部数が紹介されている. プルングラーパーについては同書73頁以降参照.
- 60 Hans Robert Jauss: „Kunst und Geschichte.“ In: *Literaturgeschichte als Provokation*. Frankfurt a. Main 1970. S. 230.
- 61 Rosmarie Zeller: „Zur literarischen Biographie der siebziger Jahre.“ In: *LiLi* 40 (注39) S. 112.
- 62 Enzensberger: *Der kurze Sommer der Anarchie. Buenaventura Durrutis Leben und Tod*. Frankfurt a. Main 1972, S. 14.
- 63 引用は次による Fritz Martini: „Über die gegenwärtigen Schwierig-

keiten des historischen Erzählens.“ In: *Geschichte und Geschichtsbewußtsein*. Göttingen 1981. マルティーニの講演は我々のテーマにとっても重要な視点を含んでいる。しかし彼の講演原稿を私が入手したのはこの手稿を了えたのちであった。伝記（や彼らに馴染み深い「昔からの」対象）にたいする関心が専門の歴史学者の間で近年ふたたびたかまっている印象を与える証拠として次の二例を挙げることができよう。Lothar Gall: *Bismarck*(1980). Christian Meier: *Cäser* (1982). さらにビルケンフェルト(注39)参照。またゲルマニスティクの領域ではヴォルフガング・レップマンのルルケ伝(1981)の例をあげることができる。

- 64 Maria Harig (注39) S. 100 f. 参照。
- 65 初めに触れたオースティンでの会議や、トリノでの歴史学会——それは本稿終了後開催され、それにかんしては、エーバーハルト・シュトラウプが „Der Roman der Völker. Geschichtsschreibung zwischen Erzählung und Statistik“ という報告を *Frankfurter Allgemeine Zeitung* Nr. 135, 1982年6月15日号, 25頁に載せている——はこのような状況を反映している。同様に „Poetik und Hermeneutik“ の諸巻, 就中次の巻を参照。Bd. 5 Reinhard Koselleck/Wolf-Dieter Stempel (Hrsg.): *Geschichte — Ereignis und Erzählung*. München 1973 及び Bd. 8 *Identität*. Hrsg. von Odo Marquardt und Karlheinz Stierle. München 1979.
- 66 Robert Musil: *Der Mann ohne Eigenschaften*. In: R. M. *Gesammelte Werke* Bd. 1. Reinbek 1978, S. 254; Scheuer (注5) S. 248参照。

付記: 本稿は, 昭和57年10月12日関西大学第一学舎に於いて, 文学部主催学術講演として行なわれた講演原稿(Helmut Kreuzer: Biographie, Reportage, Sachbuch — Bemerkungen zu ihrer Geschichte seit zwanziger Jahre)を, 同教授の好意ある同意を得て翻訳したものである。